

# 顫える身体の行方

——古井由吉『杳子』論

片野 智子

「キーワード」①変遷する身体 ②顫える身体 ③拡散と収縮 ④病気と健康 ⑤多文化主義とナシヨナリズム」

## 一、同時代性を越えて——問題提起

古井由吉が一九七〇年八月の「文芸」に発表した『杳子』は、山の中の谷底で出会った彼と呼ばれる青年と、特異な精神世界に住まう杳子という女性との交流を描いた物語である。『杳子』が芥川賞を受賞した一九七一年の三月二二・二四日、小田切秀雄は「東京新聞」夕刊紙上で文芸時評「満州事変から四〇年の文学の問題」を発表し、昨今の文壇では「自我と個人的な状況のなかにだけ自己」の作品の真実の手ごたえを求めようとしている「脱イデオロギーの内向的な文学的世代」が「一つの現代的な時流を形成している」と指摘した。小田切によって命名された「内向の世代」の代表的な作家として古井由吉が挙げられるようになるのはよく知られる

ところだが、「内向の世代」そのものに対する小田切の評価は、彼らの登場を政治的批判意識の衰退の現れとみなす極めて批判的なものであった。この小田切の論に対して柄谷行人は、一九七一年五月九・十日の「東京新聞」夕刊紙上で発表した「内面への道と外界への道」で『杳子』を取り上げ、本作で主題化されているのは「充実した現実感をはげしく渴望しながら、しかし、贖物の「現実」に自足することをあくまで拒むということ」であるとした。その上で柄谷は、「内面への道」が「現実」に対するアンガージュマンを放棄しているという、ありふれた非難」に終始する小田切の態度を批判し、真の「外界への道」は「内面への道」を模索すること以外に切り拓かれはしないだろうと述べている。一方で、柄谷は同年一月一日の「日本読書新聞」上に「自然的なあまりに自然的な……」を発表し、「内向の世代」に欠けているのは実は「内部の豊穡さ」なのだ。というより、内部をもちえないことが、逆説的にわれわれを「内向的」たらしめているのだ」と奇妙な発言をしている。

こうした柄谷の発言を理解するためには、一九六〇年代から一九七〇年代にかけての社会状況の変化をトレスしておく必要がある。見田宗介によれば、敗戦から高度経済成長の終焉にあたる一九七〇年代初頭までは、アメリカン・デモクラシー（戦後民主主義）とソビエト・コミュニズム（共産主義およびマルクス主義）という「二つの大文字の「理想」」が、肯定的にせよ否定的にせよ、社会的に大きな影響力を持っていたという。そこから見田は、戦後から一九七〇年代初頭までを「理想」（および「夢」）の時代と名付け、ここでは「現実」は「理想」との関係に支えられることで成り立っていたと指摘している<sup>(1)</sup>。一九四六年に発刊された「文学時標」において文学者の戦争責任追及を宣言して以来、「プロレタリア文学理論の批判的継承者」<sup>(2)</sup>という立場を一貫して担ってきた小田切の中にも、この「理想」と「現実」の関係は見出せるだろう。すなわち、小

田切にとつての「現実」とは、いずれ到来する真の共産社会の実現という「理想」に裏打ちされたものでなければならず、そのような「理想」への志向を欠き「自我と個人的な状況」にのみ関心を向ける古井ら新人作家の態度を「現実」からの逃避と見なしたのだ。

一方で、六〇年代に入ると「理想の時代」には陰りが差し始める。急速な高度経済成長が、「一億総中流社会」と呼ばれる大衆社会への移行を人々にもたらしたのだ。吉見俊哉によれば、六〇年代に起きた「全般的な高学歴化、ホワイトカラー層の拡大、大量の農村人口の都市への流入と急激な核家族化」は「全国レベルでの日常生活の平準化」を促したという<sup>(3)</sup>。こうした社会の大衆化に伴い、都市の人口過密化と農村の過疎化、伝統的秩序意識の解体といった、これまでの「理想」では解決しえない問題が次々と生じた。そうした状況の中で六八年から六九年にかけて高揚したのが全共闘運動である。見田が指摘しているように、全共闘に集った若者達の目的は「理想への反乱」、すなわち既存の規範や理念の一切の破壊であった。確かに、全共闘運動は闘争による社会の革命という「理想」を掲げてはいたが、それは既存の「理想」を全否定することで成り立つものであり、〈理想の否定を理想とする〉というパラドックスを抱えていた点で、「理想の時代」の行き詰まりとその終焉をまさに象徴するものであったと言えよう<sup>(4)</sup>。

以上のように、高度経済成長期の社会的大変動と、それに伴う急進主義的な運動の高揚によって、それ以前の社会を支配していた「理想」の効力が衰退するという事態が起きる。これは、ジャン・フランソワ・リオタールが「大きな物語の凋落」という言葉で指摘したポストモダンの状況と通じている。リオタールによれば、ポストモダンⅡ七〇年代以降の世界では、社会全体で信じられていた規範や理念が失効し、小さな無数の規範の乱立に取って代わられたという<sup>(5)</sup>。日本においてポストモダンの状況が前景化するのには石油ショックと連合

赤軍事件を経た一九七〇年代後半のことだが<sup>(6)</sup>、そうした近代からポストモダンへの移行を一九七〇年の時点で先見的に感じ取っていたのが柄谷である。つまり、「内面への道」なくして「外界への道」はありえないという柄谷の主張は、自己と他者、および自己と社会の関係を支えていた大きな規範が効力を失いつつある中で、これまでの規範＝「理想」に支えられてきた「現実」を「方法的懐疑」によって徹底的に疑うことでしか、「現実」の向こう側に存在する他者とコミュニケーションできないという意識に基づいている。だが、全体的な規範や理念が空虚になるということは、肯定するにせよ否定するにせよ、それらに依拠することで成立していた主体、内面性、自己アイデンティティ同一性なども同様に価値を失うことを意味している。柄谷が「内向の世代」に欠けているのは「内部の豊穡さ」であると言ったのは、古井ら新人作家達が直面している問題が、もはや大きな規範や理念に自らの立脚点を持たず、自己同一性、要するに自分が何者であるかという自覚を得られないというアポリアであることを示唆していると考えられるだろう。柄谷が『杵子』に見出した「現実感」の喪失とは、自己同一性の解体というポストモダンの状況を先取りする形での問題提起であったのだ。

同様に、石曽根正勝は『杵子』で描かれているのは「私」の崩壊であるとした上で、『杵子』は「私」から「他様」＝「他者」の追究へと「転回」した作品であると指摘している。石曽根の論は、『杵子』が「メタ物語に対する不信」が露呈したポストモダン」を前にして、いかに「極私」の隘路」を抜けだし他者と関係を取り結んでいくかを描いた作品であるとして、その先駆性を評価するものである<sup>(7)</sup>。だが、『杵子』の物語を綿密に辿った時、そこに見出されるのは自己同一性の解体ではなく、身体に根ざした全く新たな生の可能性ではないか。その点を究明するために本稿では、まず冒頭の谷底において杵子の身体が拡散と収縮の闘ぎ合いの中にあることを重視し、谷底で出会った彼と杵子が互いの身体を介して共振する関係にあることを示

してゆく。その上で、物語を杏子の身体の変化に添って三つのパートに分け、拡散と収縮の狭間をめぐるしく行き交う杏子の身体が、彼との関係が進むにつれて、拡散の動きが収まる一方で顫えを宿していく過程を分析し、杏子の顫える身体が有する新たな生の可能性について明らかにしたい。

## 二、閲ぎ合う身体

『杏子』の物語は、「十月もなかは近く」の「K岳」に散策に来ていた彼とその谷底でうずくまっていた杏子との出会いから始まり、季節が再び秋を迎える頃に、彼が杏子の部屋を初めて訪れる場面で閉じられる。約一年間にわたる彼と杏子との交流を描いた本作について、永島貴吉は「この小説は一年という流れを感じさせない」のは「世界が静止の相のもとにとらえられている」ためであると述べている<sup>(8)</sup>。同様に、前田愛は本作の物語構造が「閉ざされた円環」を成していることを指摘している<sup>(9)</sup>。しかし、『杏子』ではそうした表面的な静けさとは裏腹に、微細に変化し続ける杏子の身体が描き込まれており、それと連動するように、彼と杏子の関係も刻一刻と変動し続けている<sup>(10)</sup>。その流れを明らかにするためにも、冒頭の一章を丸々割いた上に、彼と杏子の視点から二度に渡って語られているという点で、本作において非常に重要な位置を占めるであろう谷底での出会いの場面において、杏子の身体が如何なる状態にあるのかを捉えたい。まず、谷底を訪れた杏子は次のような外界の異常に見舞われる。

岩に腰をおろして、灰色のひろがりの中に軀を沈めたとたんに、杏子はまわりの重みが自分のほうにじ

わじわと集まってくるのを感じて、思わずうずくまりこんでしまったという。「…」谷底のところどころに、山の重みがそこで釣合いをとる場所があつて、そんな一点に自分は何も知らずに腰をおろしてしまった。そう彼女はとっさに思った。

ところがこの直後、「顔を上げて見まわすと、周囲の様子が変わっていた」として、杏子に重くし掛かっていた岩々は「流れ落ちる感じ」へと変化する。杏子の知覚世界における周囲の岩々はめまぐるしく動いており、それを杏子は「山の重み」や「流れ落ちる感じ」といった、漠然とした圧力や揺れとして、身体の内部で感じ取っているのだ。微細に揺れ動きながら「お互いに邪魔しあつてようやく止まっている」岩々のひしめき合いを身体の奥深いところで感じてしまった杏子は、「こんなひしめきが、どうしてこの軀を支えてくれるだろう」と嘆く。更に、「立ち上がったら、もう一気に駆け下るよりほかにない。でも、すぐに立ちすくんでしまいそうだ……」とあるように、岩々の動揺に感応する杏子の身体もまた、自らの軸を失つていくのである。

そこで杏子は「目の前に積まれた小さな岩の塔」を一心に見つめることで外界の安定感を取り戻そうとするが、「ひとつひとつの岩が段々になまなましい姿になり出した」かと思うと、「それを見つめる彼女自身の軀のありかが、岩の塔をかなめにして末広がりになってしまい、末のほうからたえず河原の流れの中へ失なわれていく」。杏子の身体はもはや確かな輪郭を保っていられず、アメーバのように不定形に拡がっていくものとして感じられているのだ。更に、身体の拡散によって「自分の中心をつかめなくなった」杏子は、「彼女の思いはきれぎれに流れただよい、あちこちで物憂げにつぶやいている」という事態に陥る。言うなれば、杏子の自己は粒子のごとく分散し、あちこちに遍在している。しかし、「その思いの数だけ彼女はあちこちにいて、そ

してどこにもいない」とあるように、分散した自己を統御できない杳子は、自己の存在そのものが失われたような感覚に見舞われてしまう。つまり、自己を捉えようとしてもそれはばらばらになって流動を繰り返すだけで、杳子は連続的かつ同一的な自己の意識を持つことができなくなるのである。その状態は杳子に途方もない孤独感や心細さをもたらすが、自己を連続的に統合しえないが故に、杳子は過去からも未来からも切り離された剥き出しの（現在）に触れることにもなる。それは、「混り気のない生命感」という強烈な生の実感を呼び覚ます体験として、杳子に次のような認識をもたらすのだ。

人間であるということは、立つて歩くことなんだなあ、と杳子は思ったという。立ち上がって、どれも自分とひとしい重みをもつ物たちの間で、生意気にも内と外を分けて、遠い近いを分けて、自分勝手な視野をつくって、大きな頭を細い首の上のせてうつらうつらと歩きまわることなのだ。だけど、内と外に分けたとたんに、畏れが内側に流れこんで、いっぱい満ちて、姿全体にどこか獣くさい感じをあたえる。自分はもうここから立ち上がらない。この次に自分がここから動くのは、この河原の岩がいちどきに雪崩れだす時。その時、自分はもう岩のひとつになりきって、何も感じないで、沢山の岩たちと一緒に「ごうごう」と叫びあつて落ちていく……。そう杳子は思った。そして足が段々に砂利の中に埋まっていくのを感じた。

身体の拡散とそれに伴う自己の断片化によって、杳子は（内／外）や（遠い／近い）という二元論によって秩序づけられた世界から逸脱する。「自分はもう岩のひとつになりきって」とあるように、それは周囲の事物

との感応・同化という現象を引き起こす。クラウドディア・ペンティーンによれば、近代に入ると、「皮膚を終端の境界とするような、閉ざされ、境界づけられた個別の身体」に「魂」、すなわち〈私〉の意識が内在化されていると見なす、新たな身体規範が成立したという。ここでは〈精神／身体〉の二元論に基づき、身体は自己の〈内／外〉を隔てる被いや仕切りと見なされる一方で、主体や自我と呼ばれるものが内部の中心を占めることとなる<sup>(11)</sup>。しかし、そのような近代的身体観に対して、杓子の身体は果てもなく拡散し流動していくことで、事物と一つになることさえ可能にするのだ。しかもこの時、流れ落ちる岩に憑依する杓子とは別に、「足が段々に砂利の中に埋まっていく」、つまり砂利と一体化しかけている杓子が同時に存在している。身体が拡散することで杓子の自己は粒子状に分散していくと先に述べたが、岩に感応する杓子も、砂利に感応する杓子も、解体さればらになつた自己の断片の一つなのである。

しかしその一方で、杓子が岩々の狭間で「軀をきつく抱えこ」み「うづくまりこ」むという姿勢をとっていることにも注意が必要だろう。河本英夫によれば、触覚とは「身体が在るといふ、身体が存在にかかわる感感であり、身体存在の基層にある」ものであるという。河本は「在るといふ現実にはさまざまな度合いがあり、存在か無かという二者択一にならない不透明な分厚さをともなう事象である」とする一方で、自らの身体に触れる時「在ることはそれとして感じ取られていて、意味のずっと手前で、在ること／無いことの漠然としてはいるが、間違えようのない区分を形成している」と述べている<sup>(12)</sup>。これは、例えば痺れた足はここに在ると感じられないが、揉みほぐしていく内に少しずつ感覚を取り戻していくように、触覚性身体は視覚的身体とは異なり、もっと複層的かつ可変的な存在であることを意味している。この、言語では捉えきれないような身体存在感を、杓子は手繰り寄せようとしているのではないか。つまり、杓子が身体を固く縮め両手で抱きしめ

るのは、痺れた足先を揉むのと同様に、身体がここに在ることを感触によって確かめようとするためである。また、それだけに留まらず、抱きしめた身体の温もり、強張り、痙攣、あるいは身体を収縮させることで起きる姿勢の変化や筋肉の緊張、そうした一つ一つの感覚を寄せ集めて築かれた「かすかな感じのする軀」によって、杏子は拡散していく身体をかううじて繋ぎとめているのだ。ここでいう「かすかな感じのする軀」とは、身体を限界まで収縮させることで、かううじて保たれる自己の〈まとまり〉と言い換えることもできるだろう。ただし、ここで言う自己の〈まとまり〉とは、連続的かつ同一的な自己とは全く異なる、在るとしか言いようのない漠然とした感触や感覚であることに注意したい。

さて、杏子は岩々の間でうずくまることではばらばらに解体しかけた自己の〈まとまり〉をかううじて保持していたが、谷底へ降りてきた彼の姿を杏子の視界が捉えた時、新たなドラマが始まる。「背を獣みたいにもつさりまるめて」、「おさない目もとに不安を剥き出しにして」近づいてくる彼の姿は、〈内／外〉を分けることが「畏れ」に繋がる「獣くさい」杏子の身体に通じている。この時、彼の側も、全身で「防禦の構え」をとりながらも「遠くへ消えていくかすかな表情」を浮かべた杏子の拡散する身体に反応し、その「鈍くひろがる女の視野の中を影のように移っていく自分自身の姿を思い浮べ」ている。「歩むにつれて、形さまざまな岩屑の灰色のひろがりの中に、その姿は女のまなざしに捉えられずに段々に傾いて溺れていく」とあるように、彼は杏子の視界に映り込んだ自分の姿が今にも岩々へ溶け込んでいくように感じる。再び杏子の視点に戻ると、「ところが男が歩いていくにつれて、灰色のひろがり、男を中心にして、なんとなく人間くさい風景へ集まってくる」。ここでは、〈内／外〉の境界を越えて拡散していく身体が岩や砂利と一体化することで、〈身体／物体〉の境界さえも不確かになってしまいう杏子の精神世界に際どく接近しながらも、杏子の言うように「立って歩く」

ことで、かろうじて自己の身体を物体と区分している彼の姿が、杏子の側から捉えられているのである。そのような彼の姿に杏子は「おぞ気をふる」うほどの感応を示し、一方の彼もまた杏子の「まなざしを鮮やかに軀に感じ取る。『杏子』の一章は彼の視点から杏子との出会いを語った後、「谷を降りてくる彼の山靴の音を、杏子も早くから耳にしていたという」として、山から下りた後に杏子から彼が聞いた話が挿入されるという構成になっているが、彼から見た杏子の姿と杏子から見た彼の姿、そして互いの目に映る自分自身の姿が重なり合い、共鳴し合う様子が描かれることで、二人が身体を介して共振しあっていることが描き出されるのだ。

更に、互いの「まなざしとまなざしがひとつにつながり、その眼差しの磁力に牽引されるようにして彼が杏子の元へと歩みよった瞬間、杏子は自ら手を差し伸べて、彼に麓まで連れて行ってくれるよう助けを乞う。

彼が右肩をさし出すと、杏子は自然に彼の右腕につかまってきた。彼は黙ってすぐに歩き出した。杏子は軀を少しこごめて、ぬかるみを踏むような足どりで歩いた。腕から重みが少しも伝わってこない。杏子の體はほのかな温みとなって彼の軀のそばに漂い、彼の歩みにつれて、流れるように従ってきた。緊張の後で、彼も口がきけなかった。

彼は杏子の身体を皮膚の内側へと浸透してくる目には見えぬ温もりとして受け止め、重ささえも意識しないほどにそれと感覚を同調させている。この時、彼が感じている緊張と疲労からは、二人の触れあいがほとんど性的な交感に等しいものであることが伺えるだろう。だが、そのような彼と杏子の高揚した一体感は決して長く持続することはない。谷底から帰還した後、街中で再会した杏子が「別人」のごとき顔立ちに変貌している

ことに彼がたじろぐように、杏子の身体は絶えず変化することで彼の眼差しをすり抜けていく。そのような杏子の身体を前にして、彼は時に惹かれ、時に恐れながら、共振と疎隔を繰り返しつつ、杏子との関係を模索していくことになるのである。

以上のように、谷底における杏子の身体は、①外界が流動的で不安定な様相を現す、②身体の内感が揺さぶられ、③身体の輪郭が溶解しアメーバ状に拡散して、④自己が断片化し、⑤その過程で外界の事物や他者と感応し同化するという、おおよそ五つに分けられる流れを辿っている。しかし同時に、杏子はこの身体の拡散とそれに伴う自己の断片化に抵抗するべく、身体を極限まで収縮させ、そこから生じる感触や、様々な感覚のざわめきを感じ取ることで、ばらばらに断片化した自己の（まとまり）をかるうじて保っている。こうした拡散と収縮の闘ぎ合いの中でこそ、杏子の身体は捉えられなければならない。加えて、都会での再会から始まる第二章以降の物語は、主として彼の視点に添って進んでいくが、杏子の身体を一方的に観察し治療しようとする彼の試みは、拡散と収縮が闘ぎ合う杏子の身体に彼が次第に釣り込まれていくことで突き崩されることになるだろう。そこで次章では、拡散と収縮の闘ぎ合う杏子の身体が、彼との関係において変容する様相を三つのパートに分け、作品の展開に即して見ていきたいと思う。

### 三、変遷する身体

#### (1) 反転する身体〜二章から三章まで

その第一は、杳子の身体が収縮と拡散を繰り返す一方で、めまぐるしい反転を見せると共に起こる彼との関係の変化である。冬の駅で杳子と偶然再会した彼は、谷底で見た「漠とひろがった顔全体の無表情」とは違い、むしろ「内側から輝き出る生彩」を得て「別人」のように変貌した杳子の相貌に驚く。しかし、その顔の中には「たえず生彩をあらたにしていけないと、たちまちまた漠とひろがってしまいそうな、不安定な感じがどこかに」漂っている。彼が杳子の相貌に見出す茫漠とした感じは、杳子の身体がいつまた散り散りに拡散するか解らない不安定さを孕んでいることを示すものである。実際に、杳子はしばしば自らの行動や思考を制御できなくなり、その場でうずくまったり、目に見えて動作が不自然になったりする。彼と杳子の交流はこの《発作》を克服することを目標としてひとまず動き出すが、二人の関係が擬似的な医師と患者の関係から次第に逸れていくところに、この物語の核が存在する。そうした二人の関係の変化を導く杳子の身体について、まずは詳しく見ていきたい。

杳子の身体が抱え込む危うさが、彼女の言動となつてまず現れるのは、彼と杳子が喫茶店で待ち合わせした時である。杳子は店の前まで辿り着きながらも、ドアを開けて中へ入ることができない。これについて杳子は、表の看板を見つめている内に字がただの字に見えてきて、店の名前が読み取れなくなってしまったのだと説明する。ここから解るのは、言葉（文字）とそれが指し示すところの意味の繋がりが、杳子の中では切断されて

しまっているということである。言葉と意味との連関が失われているということは、意味が本来分節化する筈の事物や事象も——そこにはむしろ自己自身も含まれる——それぞれのまとまりを失ったまま、辺りを漠然と浮遊しているということだ。店を探している時の気持ちに「長い暗い廊下を歩いて」いて「両側に同じような扉がずらあつと並んでる」ようだったと説明する杏子は、まさにそうした事物を分節化し損なう事態に立ち会っているのだが、そこで杏子は次のように彼に訴える。「ちゃんとそうした場所に出ようとずんずん歩いて行くのだけれど、どこまで行つても地面が傾き上がっていくんです。皆、どうして、こんなところで暮らしていられるのつて叫びたくなるけれど、皆、平気そうなので、困つてしまふ……」。ここからは、店を選ぶことに限らず、杏子が周囲の世界に対してある種の馴染みのなさ、違和感のようなものを常に抱いているということが解るだろう。意味をはぎ取られた〈物自体〉に直面している杏子にとって、世界とはおよそ不自然で不気味なものとして立ち現れているのだ。それは、ヴォルフガング・ブランケンブルクが分裂症の基礎障碍として指摘した、「自然な自明性の喪失」とよく似た事態である<sup>(13)</sup>。看板に書かれた文字を読み取ることや、平坦な道を歩くことは、普通の人々が生活を送る上でごく自然に、それと意識することなく行っている些細な事柄であり、「自然な自明性」の範疇に入ると言える。木村敏はブランケンブルクの論を踏まえて、あらゆる「自然な自明性」を基礎づけているのは「私にとって自己があること」すなわち自己の自明性であるとして、分裂症の根源的事態とは自己の自明性の喪失であり、それは「自他未分の領域からの自明な個別化の不成立」から引き起こされると述べている。この自明な個別化の不成立とは如何なる事なのか。木村はこれを人と人の「あいだ」に関わる問題であるとする。すなわち、自己が自己となるには、自己ならざる他者との出会いを必要とし、他者もまたそうである以上、「自己が自己であるということも他者が他者であるということもともに——しかも両者が互

にその立場を逆にしても結局は同じこととして——両者をそれぞれ両者として成立せしめているような第三の次元に依存している」というのだ。木村はこの「第三の次元」を自己と他者の「あいだ」と呼び、自己と他者とはともにこの「あいだ」から成立してくるものでなくてはならないとした上で、分裂病者とはこの「第三の次元」としての「あいだ」の働きを感じとることができない者のことだと指摘するのである<sup>(14)</sup>。

このような木村の指摘は、杏子の拡散する身体が〈内／外〉の境界を超えていくものであることに関わってくるだろう。周囲の事物と感応・同化してしまう杏子の身体は、自己と他者とを区別する「あいだ」を感知することができないのだ。杏子が周囲の世界に感じる違和感とは、まさにそうした自己の個別性の捉え損ねから生じているのである。言葉と意味との疎隔化が引き起こす事物の分節化の機能不全も、杏子のそうした身体でありようと深く結びついていると言えるだろう。例えば、「山の中で彼に出会ったおかげで、元気になった」と彼女はくりかえし言った。そのくせ、《病氣》がいちばんひどかったのは、山から帰ってきてひと月ほどの間だったと言う」とあるように、杏子は自らの身体が置かれた状況を正確に把握することができず、そのつど矛盾したことを口走る。しかし、ここから単純に、杏子が狂気に冒されるとか、杏子が語る身体の拡散現象は彼女の妄想によるものであるとか、そのように解釈することは妥当ではないだろう。というのは、谷底で起きた《発作》の際に、周囲の事物へと自らの身体が溶け出していく、境目がつかなくなるほど一体化してしまふ現象に見舞われたことについて、杏子が「幸福」であると同時に「二度とあんな風にならない」ほどの苦痛を感じたと言うように、杏子の拡散する身体はある一つの言葉によって規定できるものではなく、幸福と苦痛という二律背反を同時に孕む混沌としたものだからだ。つまり、自らの身体が拡散していく様相を杏子がいくら言葉で言い尽くそうとしても、その体験は言葉によって分節化できるものではないため、結果として

杏子の言葉は自らの身体の混沌を表しきれず、どこか矛盾したように見えてしまうのである。

杏子の特異な言動に触れた彼は、喫茶店での逢瀬を止め、その日毎に目的地の公園を決めて杏子にそこまで案内させるといふ作業によって、杏子が一人でも外出できるようにするための訓練を開始する。そこからは、彼が杏子の治療者として振る舞おうとしていることが伺える。しかし、そうした彼の目論見とは別に、杏子は自らの身体の拡散に対して、谷底と同じく、身を収縮することで抵抗する姿を見せ始める。例えば、杏子が公園の河原で大きさも形も不揃いに積まれた不安定な石の塔を見つめている内に、杏子は「ふときかん気な目つきになり、その石を天辺の石の中心よりもわざと左へ大きくずらしてのせ」と、「軀を低く小さくこころめ」る。「ひと石ひと石、いまのせられたばかりのように動揺に怯えながら、全体として不安に満ちたままなまましい成長の気配を帯びて、空にむかって伸び上がり、さらに音も立てずに伸び上がっていく」ように見える岩の塔に、彼は「ふと杏子という存在を感じ当てたような気」になる。不安定にその場で揺れ動きながらも、果てしなく伸び上がっていく岩の塔は、収縮と拡散を同時に行う杏子の身体の暗喩に他ならない。すなわち、杏子は身体の収縮によって生じる微細な感覚を凝集させ、「かすかな感じのする軀」＝自己の（まとまり）をかるうじて形作ることで、身体が散り散りに拡がって自己が断片化していくもう一つの感覚に抗っているのである。

このような身体の拡散に対するその収縮による抵抗といった動きとは異なる形ではあるが、杏子の身体が対極的な反転を繰り返すことも、実は拡散と収縮の闘ぎ合いのバリエーションの一つと言える。例えば、公園を歩き回る杏子の姿は、彼の目には次のように映る。「彼女の軀の動きは滑らかな流れに乏しく、いわば折れ線ばかりから成っていて、キュツキュツと向きを変えるたびに、その折れ目に爽やかな精気がみなぎった。そして立ち止まると、動きの余韻のように、女らしさが、細い軀にすうっとささしてくる。しかしほんのしばらくで

も余計に立ち止まっていると、その軀は糸をゆるめられた操り人形のように急にぎこちなくなりかかる。緊張から弛緩へ、弛緩から緊張へ、一瞬も立ち止まらない杳子の身体は、「少女めいた細い軀」、「細い甲高い声」という言葉で表現される痩せ細った少女の様相と、「女くさ」い腰つき、「成熟した女の声」、「低い、ふくらみのある声」という豊満な女の様相との間を絶えず行き交うものとして彼の目の前に現れるのだ。そこには、少女の姿に収縮しようとする運動に抗ってそれを解体する拡散が起こり、今度は豊満な女へと収縮しようとするともともとまた拡散にさらされるといった、杳子の不安定な身体の姿が現れている。それは、揺れ動く岩の塔のように一歩間違えば即座に崩壊し、散り散りに拡散していきかねない危うさを常に孕んでいるのである。

もつとも、こうした杳子の姿を見せられる彼の目には、うずくまりこむ杳子の姿は「醜怪な病い」の業としか映らない。そのめまぐるしい身体の反転についても、不自然さやぎこちなさばかりが目につくとして、彼は「軀をないがしろ」にしていると杳子を批判する。これは治療者としての見方であるが、一方で、杳子は「軀をないがしろにするもんだから、自分のありかがはつきりしなくなるんだよ」という彼の語りは、杳子の身体の拡散を捉え、それと共振しあっているからこそ出てくるものでもある。実際に、公園で杳子と追いかけてこをした際に「杳子のありがたが、目には見えなくても、林の中をたえず動きまわる一点の気配として、確かに伝わってくるように感じられた。ときには、茂みという茂みが杳子のひそむ気配を宿してふくらむことがあった」というように、彼は「一点」に収縮することもある一方で、「ふくらむこと」で外界へ拡散してゆく杳子の身体を、目には見えぬ「気配」として捉え、それと自らの身体を共振させることで、治療者の枠組みから次第に外れていくのである。ところが、そうした杳子との共振も長くは続かず、彼が杳子を抱き寄せて口づけをした途端、杳子の唇は「固い輪郭」をとりつつも、「受け止めるでも拒むでもなく、感触をなにか漠としたひろが

りの中へばかしてしま」う。そして、杏子と繋がり合えたという感覚は、「固い輪郭」と「漠としたひろがり」という収縮と拡散の闘ぎ合う杏子の身体の中へ曖昧に吸収される。そのような、共振しあったかと思えばすぐに疎隔してしまう杏子の身体に対して彼が焦燥感を募らせることで、二人の関係は次なる段階へと進んでいくのだ。しかも、それによって、杏子の身体も変化を余儀なくされるのである。

(2) 重さを露わにする身体〜四章から五章まで

第二段階は、杏子との共感を更に深める「彼」が、治療者であることを放棄した時に起こる杏子の身体の変容を中心に展開する。徒勞に終わった公園めぐりの後、彼は「ともすれば大道の真中で茫然と立ちつくしてしま」う杏子に、自分自身の軀のことを気づかせてやりたい、そして自分自身のありかを確認にしたい」という苛立ちを募らせる。そこで彼は都会の裏路地にある旅館に杏子を連れ込み、初めて肉体関係を結ぶ。つまり、肌と肌とを触れ合わせ、擦りつけ、その熱を共有することで、杏子の身体の輪郭を外側から形作ってやろうとするのだ。しかし、そうした彼の望みとは裏腹に、裸になった杏子は「軀の豊かさ」を露わにしながらも、「普段よりも瘠せ細った少女の顔つき」になって彼を拒む素振りを見せる。杏子の身体はまたしても少女と成熟した女の間を反転し、拡散と収縮の狭間で激しく闘ぎ合い、ともすればばらばらに崩壊しかねない危うさと垣間見せる。すると、「素肌まで触れ合っていないながら杏子をつかみ取れないでいる彼自身の軀も、ときどきふつと遠いものに、あわててたぐり寄せなくてはならないもののように感じられることがあった」とあるように、彼自身の身体も漂い、拡散し始める。このように、彼は肉体関係を持つ以前より杏子の身体の拡散に深く共振

してゆくのである。しかも、都会から郊外の旅館へと場所を移しながらなおも杏子との情事に耽るうち、更に彼の中である変化が生じる。それが次の場面である。

肌の感覚を澄ませていると、彼は病んだ杏子の感覚へ一本の線となつてつながっていくような気がする  
 ことがあつた。道の途中で立ちつくす杏子の孤独と恍惚を、彼はつかのま感じ当てたように思う。

……杏子は道をやって来て、ふっと異なつた感じの中に踏み入る。立ち止まると、あたりの空気が澄み  
 かえて、彼女を取り囲む物のひとつひとつが、まわりで動く人間たちの顔つきや身振りのひとつひとつ  
 が、自然な姿のまま鮮明になつてゆき、不自然なほど鮮明になつてゆき、まるで深い根もとからたえずじ  
 わじわと顕われてくるみたいに、たえず鋭さをあらたにして彼女の感覚を惹きつける。「…」ひとつひとつ  
 つの物のあまりにも鮮明な顕われに惹きつけられて、彼女の感覚は無数に分かれて冴えかかつてしまつて、  
 漠とした全体の懐しい感じをつかみとれない、自分自身のありかさえひとつに押えられない。それでも杏  
 子はかろうじてひとつに保つた自分の存在感の中から、周囲の鮮明さにしみじみと見入っている。(傍線  
 筆者)

ここでは、外界の鮮烈な顕れに感応することで身体がアメーバ状に拡散してしまい、自己がばらばらに寸断  
 されたような心細さに襲われながらも、自ら(の身体)がここに在るといふ微かな内感のもとに分散していた  
 感覚を再び凝集させ、それによつて拡散と拮抗する杏子の姿が描かれている。そして彼は皮膚感覚を研ぎ澄ま  
 せることで、それを我が身に起きたことのように感じ取っているのだ。加えて、傍線を付した「彼はつかのま

感じ当てたように思う」に続く、「……杏子は」以下の部分は、杏子の視点で語られる彼女の内感覚とも彼女が想像した彼女の内感覚ともつかぬ微妙な語りの様相を示し、そうすることで二人の距離をほとんど無化してしまふ。そのような性交を通しての官能的な身体感覚の共振によって、彼は杏子と「一本の線となつてつながつていく」ようなある種の一体感を手にするのだ。これまで杏子の身体は目に見えぬ温もりやひろがりとして彼の身体の内側へと浸透してくるよう感じられていたが、ここではむしろ彼の方から杏子への一体化が起き始めている。このように、彼は杏子と肉体関係を持つことで、自らの身体の輪郭をぶれさせていき、杏子の治療者であることよりも、杏子そのものになることを望むようになるのである。

ところが、「杏子の感覚の中へもう一息深く分け入ろうとすると、糸は微妙にほぐれて、性の興奮の中へ乱れていく」とあるように、身体感覚を介して杏子と一つになろうとする彼の望みは容易には成就しない。更には「そんな繰返しに耽つて、彼の軀は杏子とのいとなみを重ねてもいつこうに成熟しないで、いつまでも若い男らしい求めの中に留まっていた。それにひきかえ、杏子の肌は素肌の冷たさを相変らず保ちながら、彼の知らぬ間に、病気を内に宿したまま女として成熟していた」として、少女の痩せ細った肢体と女の豊満な肉体の狭間で揺れていた杏子の身体は、女へと成熟することによって彼との一体化を拒むのである。彼との情事に耽る内に杏子の身体が女のそれへと成長していくことは岩坪一によって指摘されているが<sup>16</sup>、それが彼の一体化への希求を拒むものとして立ち現れていることに注意したい。

杏子の身体が女の肉体感を露わにすることで彼を拒む様子は、七月に二人がデパートを訪れる場面においてよりはつきりと描かれる。そこで杏子は再び《発作》を起こすが、これまでと異なるのは、杏子の動作がぎこちなくなればなるほど、その身体は「女くさいを剥き出しに」していくことだ。彼は杏子の「放心も露わな姿」

にいったんは同調し、「杏子の病気とまた一本の線でつながっていくような気」になるが、「成熟した女の軀の重み」を露呈したその身体に気圧される。すると、彼の動揺を鋭く嗅ぎ取ったかのように、杏子は「なによ、あんななんか」と言い放ち、彼を突き飛ばすのだ。この時、彼が杏子の身体に感じている重さとは、杏子の身体がここに在るという實在感をもたらずのものであり、それは彼と杏子とを隔絶する障壁として彼の前に立ち塞がる。そこで彼は街中への外出を避け「二人の関係をいよいよ外にむかつて閉ざしていく」ことで、「杏子と一緒に彼女の病気の中へ浸りこむことを願」うが、「病気の核のようなものにひんやりと触れることは絶えて無くなった。病気そのものはあれ以来、不貞くされた女のように沈黙しつづけていた」と、杏子に対する彼の一体化はここでもやはり拒絶されるのである。

デパートの場面を最後に、杏子は彼の前で目立った《発作》を見せなくなるが、「そのかわりに、杏子はかえって頻繁に自分の病気のことを口にするように」なる。これまで杏子は自らの身体が置かれた状況を、拡散する身体感覚（「軀のありかが、岩の塔をかなめにして末広がりになってしまい、末のほうからたえず河原の流れの中へ失なわれていく」）や、身を収縮させた際の漠然とした感覚のざわめき（「かすかな感じのする軀」）でしか語ることができず、それでも十分に捉えきれずに言葉が浮遊してしまっていた。しかし、ここでの杏子は「前みたいに自分のありかがはつきりしなくなるというようなことはなくなった。それどころかはつきりしすぎて、どうしようもない」として、身体が〈内／外〉を越えて流れ出ていく感覚ではなく、「置きっぱなしにされた重石」のような重さを持ち始めていることを訴える。その状態を杏子は次のように説明している。

以前にはまわりの物が妙にどぎつく迫ってきて、その間で彼女自身が無くなってしまいうような気がして、

瘠せた軀をきゅうつと抱えてテーブルの前でうずくまりこんでしまふ。そんなことが年に一度か二度あった。「…」まわりのものが彼女の中へ雪崩れこんでくるみたいな不安はもうない。物は物で、それぞれつらそうに自分の重みに耽っている。彼女の軀もソファーを押しつけて、恥かしくなるほどひたすらに横たわっている。

冒頭の谷底では、杏子の身体はひしめきあう岩々の狭間でその重圧に潰されかけていたが、今や彼女の身体も周囲の事物もそれぞれの重さを自力で支えている。これは、杏子の中で不透明だった〈内／外〉の境界が鮮明化してきたことを意味している。つまり、これまで自己と他者との境目が未分化な世界を生きていた杏子の身体は、周囲の事物の存在を感じ分け、それと拮抗し始めているのだ。これが、先に述べた「あいだ」において自他を区別し、自己を個別化することに通じる現象であることは言うまでもない。杏子が自らの状態について詳しく話し出すのも、まとまりを失い辺りを漠然と漂っていた事物を、言葉によって分節化することが可能になったためだと思われる。このように、この時点での杏子は、身体の拡散現象に苦しめられていた頃の状態とは明らかに異なる段階に入っており、杏子自身も「病気はたしかに良くなった」と発言している。しかし一方で、「つらそうに」または「恥かしくなるほど」という表現からは、自己と他者とがはっきりと分かたれ、そのまま自足しているような状態に杏子が羞恥や苦痛を覚えていることが解る。また、杏子は確かな実在感を持った自己の身体を、「自分の力には余る重み」だと表現する。そこにある困惑は、身体の拡散とはまた違った困難を杏子の中に引き起こすのである。

そうした杏子の困難が目に見えて現れるのは、彼女が身体の重さを感じ出してひと月ばかり経った頃、九つ

違いの姉との確執を初めて彼に打ち明けた際のことである。杏子が言うには、杏子の姉は今の杏子と同じ二十一歳の時に、杏子とほぼ同質の状態に陥ったことがあるという。例えば、家から駅までの十分ほどの道のりさえ「いつもと感じが違って、わからなく」なる姉の姿は、喫茶店の看板に書かれた文字が読み取れず、終いには「お店全体まで違った風に見えてきて、見た覚えがないような気がしてきて」、中へと入れなくなる杏子とほとんど変わりが無い。一方で、杏子は自分は姉とは違うと言い張り、症状がひどくなるにつれて自室に籠もるようになった姉が、「自分の病気にうずくまりこんで、自分の臭いの中に浸りこんで」「満足そう」に見えたといい、その姿を「淫ら」だと罵る。このことから解るのは、個体として自足している姿に羞恥や苦痛を杏子が抱くのは、それが「病気」の中に自閉する姉に感じた淫らさを想起させるためだということである。自己と他者とが個別化された結果、それぞれが自らの身体の内側に閉じ籠もり、「自分の重みに耽っている」、すなわち互いに隔絶しあっているように感じられることは、たとえそれが身体の拡散による自己の断片化がもたらす不安からの解放を意味していたとしても、杏子にとってはかつての姉の姿を喚起させるという点で、極めてネガティブなものに感じられるのだ。

杏子は姉を鏡とすることで、重さを露わにした身体、すなわち外界に対して閉じられた個別的に自閉的な身体に抵抗を示す。かといって、身体が外界へと果てしなく拡散していく状態に戻ることも杏子は望まない。そのことは、姉の病の醜悪さについてひとしきり罵った後、杏子が言い放つ「病気の中へ坐りこんでしまいたくないのよ。あたしはいつも境目において、薄い膜みたいなの。薄い膜みたいに頼んで、それで生きていることを感じてるの。お姉さんみたいになりたくない」という言葉に明瞭に示されている。では、杏子の言う「境目」で「薄い膜みたいに頼る」身体とは、一体どのようなものなのだろうか。

(3) 顫える身体く六章から八章まで

杏子の身体と彼との関係が更に変化する第三段階は、杏子の身体が薄い膜のように顫えることで生を実感するようになることを契機に幕が開く。杏子が姉との確執について彼に打ち明けてから半月後、二人はしばらくおぼろげに決める。それから更に十六日経った九月の半ばに、二人は揃って海辺へと出掛けるのだが、久しぶりに彼の前に現れた杏子の身体は、「いったんひろがり出た肉體感の影を柔らかな輪郭に漂わせ」つつも、「手首の内側やふくらはぎの肌が蒼白く澄んで細い血管を透し」、「全体に肌が薄く透明になって、病熱に洗われた肉體をひっそり包んでいる感じ」へと変貌している。そして、「杏子は自分の軀のそんな透明さを自覚して、それをいづくしんでいるように」彼は感じるのである。ここで立ち現れている透明な身体は、一度獲得した実在感を影のようにまとわりつかせながらも、どこかへ消え去ってゆくような曖昧さをもたえている点で、拡散と収縮が闘ぎ合う身体とも個別的な身体とも異なる、まさにその狭間にあるものだ。すなわち、杏子の身体は拡散と収縮の闘ぎ合いや対極的な反転といった激しい運動が収まった後も、個別的に自閉的な身体に収まることなく、内に向かつて閉じてゆく動きと外に向かつて拡がってゆく動きのきわどい均衡によって成り立っている。言うなればそれは、自己を崩壊させかねないほどに激しい身体の振幅を縮めて、微細な顫えへと変換した身体である。それによって、杏子の身体は完全に形を失いアメーバ状に溶けてゆくことも、外界と内界とを明確に隔てる分離帯になることもなく、その狭間でまさに「薄い膜」のように顫えているのである。この身体の顫動を感じ取るこそが、杏子に生の実感を与え、ひいては杏子という存在そのものを支えているのだ。

そのような杏子の変化を目の当たりにして、「杏子の病気をなおしてやろうという思い上がり」は彼の中から完全に消え失せる。「病気が快方に向かうことも、悪化することも、彼は望まなかった。良くなること、悪くなること、それはどちらも杏子を破壊することのように思えた」というように、ここでの彼は、拡散―収縮する身体と個別的な身体のどちらにも留まることができない杏子のありようを感じているところがある。その上で、「彼は、すくなくとも彼の軀は、いまのままの杏子と、同じような繰返しにいくらでも耐えられる、それに飲びさえ感じることができ……」と考えるようになるのだ。「同じような繰返し」とは、彼が杏子の身体を実体的ない気配や匂いとして感じ、性交を通してそれとの一体化を試みた途端に、重さを露わにした彼女の身体に拒まれてしまうことを繰り返してきたことに通じている。彼はそうして杏子との共振↓一体化↓疎隔↓共振……を繰り返すことで、二つの身体の狭間で顫える杏子の傍らに添おうとするのだ。郊外の旅館で情事に耽っていた際はひたすらに杏子との一体化を求めていた彼だったが、ここではそのような共振↓一体化↓疎隔の反復を受け入れてそれに寄り添う姿勢を見せているのである。

ところが、海辺から帰った後、彼と杏子は再び会わなくなり、杏子は風呂にも入らず自室に引き籠もるようになる。彼は何度か杏子と電話で連絡を取り合った後、杏子の自宅へと初めて赴く。そこで彼が目にする杏子の身体は、次のような様相を見せる。

テーブルからすこし遠めに置いた椅子に杏子は尻をあずけるようにのせ、腰から上をぬうつと前へ伸ばして、テーブルに肘だけでもたれかかっていた。いつだか病気の頃の姉について彼女の語ったとおりの格好だった。しかし杏子の軀は固さに苦しんでいる様子も、重さに苦しんでいる様子もなく、どこことなく自

足した感じで重みを椅子とテーブルに分けていた。

「たえず沁み出る体液」の「濃密なおい」に満ちた空間で、くつろいで「自足」した様子を見せる杏子は、「自分の病気にうずくまりこんで、自分の臭いの中に浸りこんで」いたかつての姉と同じ状態に陥ってしまったようにも見える。しかし、椅子に腰掛けテーブルにもたれかかり、自らの身体の「重みを椅子とテーブルに分け」ている杏子の姿は、外界と完全に隔絶されているわけではないが、さりとして〈身体／物体〉の境界を失うほどに自己の輪郭を融解させているわけでもない。杏子はテーブルや椅子と肌を触れ合わせ、自らの重さを半ば外へはき出すことで、外へと拡がり周囲の事物と感応しようとする身体の動きと、その反対に内へと閉ざし外界からの刺激を遮断しようとする身体の動きの、その両方を感じ取っているように見える。内に閉じ籠もりきりになるでもなく、さりとして外へ流れ出ていくのでもない、その境目で均衡を保っている杏子の身体  
のありようは、先に見た顫える身体とも通じるものである。

そのような杏子の姿を目の当たりにした彼は、「五日前から杏子が昔の姉のように風呂に入ろうとしなくなつたわけが、彼にはわかる気がした」と言い、「おそらく杏子は自分の病気の根を感じ当てたのに違いない。そして何をやっても、何をやられても一生変えようのない自分のあり方を知って、階下の姉にむかつて、自分を病人として病院に送りこんでもかまわないと合図を送っていたのだ」と気づく。杏子もまた、病院行きを承諾はするものの、病院に行つて「健康になる」ということは「まわりの人を安心させる」ことだと述べており、あくまでも「自分のあり方」自体は変えようとはしていないことが伺える。すなわち、病院に行つて「健康」になるという表向きのパフォーマンスとは裏腹に、杏子の身体は内へ籠る動きと外へ拡散する動きのきわどい

釣合いから生じる微細な頓えを孕んだままなのだ。従来の研究では、杏子が病院行きを決意する結末を、杏子に「健康」であることを強いてくる現実世界との相克の果ての挫折としてネガティブに捉える向きが多かったが<sup>(16)</sup>、杏子の身体はそうした彼女の決定から逸れていく可能性を秘めているのである。

ここで重要なのは、杏子にとつて「健康」とは常に姉の存在と共に用いられる言葉であるということだ。例えば、彼が杏子の自宅を尋ねるより前の場面、杏子が初めて姉との確執を語った際に、今は「健康」になり、結婚して二児の母親にまであつた姉は、一転して杏子を病人扱いし、気味悪がるようになったと述べている。そんな姉について杏子は「病気の中にうずくまりこむのも、健康になつて病気のことを忘れるのも、どちらも同じことよ」と評するのだが、この言葉の意味が解るのは、彼が杏子の自宅を訪れた時のことである。彼と杏子の元へケーキと紅茶を運んできた際の姉の動作について、杏子はテーブルの拭き方から食器の置き方に至るまで、見もせずにびたりと言いつてる。それは、日常の立ち居振る舞いの全てを決まった手順で毎日無意識に反復している姉の姿を杏子がいつも間近で見ているためであり、杏子は次のように彼に訴える。

「いいえ、あたしはあの人とは違うわ。あの人は健康なのよ。あの人の一日はそんな繰返しばかりで見事に成り立っているんだわ。廊下の歩きかた、お化粧のしかた、掃除のしかた、御飯の食べかた……、毎日毎日、死ぬまで一生……、羞かしげもなく、しかめつらしく守つて……。それが健康というものなのよ。それが厭で、あたしはここに閉じこもつてるのよ。あなた、わかる。わからないでしょう。そんな顔して……」

杏子の言葉からは、「健康」であることに固執するあまりに「自分の癖にすっかりきつてしま」い、外界からの刺激を遮断し自らの身体の内側に閉じ籠もっていった結果、「病氣」の中にうづくまると変わらぬ状態に陥っている姉に対する嫌悪が伺える。それ故に、杏子は「病氣」にも「健康」にも、すなわち拡散と収縮が闘ぎ合う身体にも自閉する身体にもなりきることを望まない。杏子は「病氣」と「健康」の狭間で顫えることに自らの生を見出しているのだ。

そのような杏子を前にして、彼は「入りこんで来るでもなく、距離を取るでもなく、君の病氣を抱きしめるでもなく、君を病氣から引張り出すでもな」という在り方によって、杏子と共に生きることを選ぶ。姉が遅んできたケーキを共に口にしながら、物を食べるといふ「鈍重な反復」を堪え忍んでいる様子の杏子に同情しつつも、彼は「ただ肌だけを触れ合って、じっとしている」。杏子はテーブルや椅子といった周囲の事物と重さを分かち合うことで身体の顫動を感じ取っていたが、ここでは彼の身体もまたそのための媒介となっているのだ。先の海辺の場面で共振↓一体化↓疎隔の反復を受けいれ、それに寄り添うようになった彼は、今度は共振でも一体化でもなく、接触によって杏子の身体の重さを分かち合おうとする。それによって、「二度と繰返しのきかない釣合い」を彼は感じ取るのだ。共振の果てに一体化を求めれば杏子は身体の重さを露わにして拒み、彼は疎隔へと放り出されるしかないが、ここでは自他の領域が完全に融解するその手前で、接触によって杏子の重さを分かち合い、それによって彼の身体も半ば杏子と融け合うことで、〈内／外〉の狭間で顫えだすのである。それは、共振でも一体化でもなく、まさに顫動の分有<sup>17</sup>と言うべき事態に他ならないだろう。

## 四、顫える身体の可能性

最後に、杏子の顫える身体が切り開く新たな生の可能性を、姉の反復する身体と比較することで明らかにしたい。両者の間にある差異は、ルートヴィッヒ・クラークスが「リズム」と「拍子」を区別したことに通じている。クラークスは「リズム」とは類似のものが回帰してくる中で途切れなく推移していくありようのことであるとして、同一物の機械的な反復にすぎない「拍子」とは全く異なるものだとしている。例えば、脈拍、呼吸、月経、覚醒と睡眠といった様々な生命現象は、類似した間隔で繰り返されるが、そこでは潮の満ち引きのように微細な変化が絶えず起きているため、全く同一のものが再び現れることは決してない。こうした自己が自己を差異化することで途切れなく変化し続けていくありようこそが「リズム」の本質であるとして、クラークスは「拍子は反復し、リズムは更新する」と述べている<sup>18)</sup>。こうしたクラークスの論を踏まえると、傍目には「病気」から「健康」に回復したように見えながらも、身に染みついた動作、すなわち「癖」を偏執的に反復することで、かろうじて日々の生活を成り立たせている杏子の姉は、まさしく「拍子」によって生かされていると言える。そのような姉の反復する身体が固執する「健康」とは、杏子にとっては結局のところ「病気」と変わり無いことは既に述べた通りだ。

これに対して、杏子の顫える身体は、内へ向かう動きと外へ向かう動きの繰り返しによって均衡を保っているが、それが「二度と繰返しのきかない釣合い」であるように、その顫動自体は常に変化していく契機を孕んでいる。というのは、杏子の〈内／外〉の境界で顫える身体は、外への拡散と内への収縮が闘ぎ合う身体を完全に放棄するのではなく、その運動を取り込みつつ、それを更新し自己差異化することで生み出されたもの

であるからだ。同様に、杏子が周囲の事物や彼に触れることで自らの重さを分かち合い、そこから身体の顫えを感じ取っているように、身体の重さもまた杏子の顫動を生み出す要素の一つとなっている。このように、杏子の顫える身体が途切れない推移の中で産出されたものである以上、それは絶えず更新され、また新たな身体を生み出していく可能性を孕んでいるのである。実際に、「帰り道のことを考えはじめた彼の腕の下で、杏子の軀がおそらく彼の軀への嫌悪から、かすかな輪郭だけの感じに細っていった」という結末の一文において、杏子の身体は彼との関係さえ変えかねない別の顫えへの移行を見せ始めているのだ。

こうした杏子の顫える身体は、大きな物語が失墜した代わりに小さな物語が乱立するようになった今日において、新たな同一化の地獄に対する一つの抵抗となりうるだろう。大澤真幸によれば、社会全体で共有されていた規範や理念が空虚化した現代社会は、多文化主義やリベラリズムといった個人の自由や価値観の多様化を重要視する思想によって表向きは動いているという<sup>(19)</sup>。だが、斉藤環が指摘するように、規範や価値観の多様化が推進され、自己決定の自由が浸透した結果、「さまざまなかンテクストのもと、複数の異なったモード」人格として振る舞う能力が、日常的に重要な位置を占める<sup>(20)</sup>。自己がどこまでも断片化されていくそうした状況は九〇年代以降の世界的な多重人格（解離性同一性障害）の急増にも見てとれるとして、現代とはまさに「多重人格の時代」なのだ<sup>(21)</sup>と斉藤は述べている。大澤真幸もまた、「多重人格は、時代の病」であるとして、多重人格とは「一つの身体を舞台にして、複数の生活様式——複数の文化——が共存」している点でまさに多文化主義を反映したものであると述べている<sup>(22)</sup>。だが、自己が断片化し拡散していく状況の一方で、国家もしくは宗教に対する自己同一化はますます進み、それらは排他的なナショナリズムや原理主義を生み出しているともいう。大澤はこれについて、一見すると対極的な多文化主義とナショナリズム、あるい

はりべラリズムと原理主義は、一方を極限まで突き進めたその時、「その反対物へと転化してしまう」ことを指摘している。すなわち、多様化した社会の中で自己が拡散していく状況は、かえってそれへの反発を引き起こし、国家や宗教に対する過度の同一化を生み出す要因ともなるのである。

このような現代社会の状況は、断片化した自己の拡散と収縮が激しく闘ぎ合い、ともすればばらばらに崩壊しかねない危うい査子の身体と響き合うところがある。だが、断片化による多文化主義がナシヨナリズムや原理主義を招くように、拡散と収縮が闘ぎ合う「病氣」を見た目だけの「健康」に押し込み、習慣的な動作を偏執的に繰り返すことで形だけの自己同一性を保持しようとしても、それは表面的な「病氣」からの逃避にしかならない。だからこそ、査子は拡散―収縮する身体の振幅を縮め、微細な顫えへと変換することで、〈内／外〉の境目で、「健康」でも「病氣」でもない新たな生を生きようとするのである。それはまた、反復による自己同一性を拒み、絶えず自己差異化し続けることでリズム＝顫えを刻む身体でもある。そのような査子の身体は、自己の断片化が招く危機に対して、身体の拡散―収縮や身体の重さがもたらす過剰な自己同一化において響き合う一方で、それを乗り越える在り方を身体のリズム＝顫えとして示しているのだ。

【注】

- (1) 見田宗介『現代日本の感覚と思想』（講談社、一九九五年四月）
- (2) 川鍋義一「戦後左派文学理論の展開―小田切秀雄と吉本隆明・一九六〇年頃まで」（囲む会編『小田切秀雄の文学論争』菁柿堂、二〇〇五年一〇月）
- (3) 吉見俊哉『ポスト戦後社会』（岩波書店、二〇〇九年一月）
- (4) 注1と同じ
- (5) ジャン＝フランソワ・リオターール、小林康夫訳『ポストモダンの条件―知・社会・言語ゲーム』（水声社、一九八九年六月）
- (6) 東浩紀『動物化するポストモダン―オタクから見た日本社会』（講談社、二〇〇一年一月）ないし大澤真幸『戦後の思想空間』（筑摩書房、一九九八年七月）を参照。
- (7) 石曾根正勝「大学紛争下、古井由吉の〈試行〉―極私と公共性、二極のリアル」（北田暁大ほか編『カルチュラル・ポリテイクス1960』10）せりか書房、二〇〇五年二月）
- (8) 永島貴吉「古井由吉論―境域の認識者」（『文研論集』一九八三年九月）
- (9) 前田愛『都市空間のなかの文学』（筑摩書房、一九八二年二月）
- (10) 『査子』を身体論の視座から読み解いた論に、田口律男「査子論―ヨウコではない査子のために」（『日本の文学』一九八九年五月）がある。〈立つて歩く身体／うづくまり横たわる身体〉という聞き合いから査子のテクスト内での運動を読み解こうとする田口の視点は示唆に富むが、査子の身体が彼との関係の中でいかに変化していくのかについては触れられていない。他には、後藤聡子「装われたメッセーger―古井由吉『査子』をめぐって」（『日本文学』東京女子大学、二〇〇二年九月）、斎藤環「内因性の文学」（『文学界』二〇〇四年五月）など、精神分析学的視点から査子の身体に現れる個々の症状を分析した論もあるが、査子の身体の変化を物語の最初から最後まで辿ったものは見受けられない。
- (11) クラウディア・ベントーン、田邊玲子訳『皮膚―文学史・身体イメージ・境界のディスクール』（法政大学

出版局、二〇一四年五月)

(12) 河本英夫『臨床するオートポイエーシス―体験的世界の変容と再生』(青土社、二〇一〇年二月)

(13) ヴォルフガング・ブランケンブルク、木村敏ほか訳『自明性の喪失―分裂病の現象学』(みすず書房、一九七八年七月)

(14) 木村敏『新編 分裂病の現象学』(筑摩書房、二〇一二年二月) 木村の「あいだ」の哲学については「関係としての自己」(みすず書房、二〇〇五年四月)も参照のこと。ただし、本稿は杏子を分裂病として断定するのではなく、杏子の拡散する身体を自己の〈内/外〉の境界、すなわち「あいだ」が不鮮明になるものとして捉えた場合、そこからどのような可能性が開かれていくかについて論じることを主眼としている。

(15) 岩坪一「『杏子』論」(古井由吉初期作品研究) 金沢大学大学院文学研究科、一九九四年四月)

(16) 田口によれば、杏子は病院行きを決意することで「日常生活への復帰」を約束されるが、それは「みずからの生を、みずからの手で封じ込める」ことを意味しているという(前掲論文より)。他にも、栗林昌子は「古井由吉論―『杏子』をめぐる」(『国語国文学研究』一九八四年三月)で杏子の「他者の回復」という「期待と計画はここで破綻をきたしている」と指摘し、片岡豊は「杏子の至福・杏子の断念―古井由吉『杏子』論」(『作新国文』一九九三年七月)で「治療者」たろうとする彼との間に「等質性」をもたらそうとした杏子の挫折の結果がこの結末であるとして、「もはや彼らの間に谷底での至福の時間は決して訪れることはないだろう」と述べている。

(17) ここでいう「分有」とは、ジャン・リュック・ナンシーの共同体論における概念の一つであり、ナンシーは『声の分割』(加藤恵介訳、松籟社、一九九九年五月)で、「共同体を結合することでも、分化することでも、引き受けることでも、散逸することでもなく、それを分有 *partage* する」ことが重要だと述べている。また、ジャック・デリダによれば、「この語はフランス語においては、差異、境界線ないし分水嶺、分裂、区切りと同時に、分与、つまり人がそれを通じて、あるいはそれを共同で所有しているがゆえに帰属という資格においてそれを分け持つところのもの」をも意味するという(『シボレート・パウル・ツェランのために』飯吉光夫ほか訳、岩波書店、一九九〇年三月)。つまり顛えの分有とは、共振の果てに一体化するのとは異なり、同じ顛えを異なる身体で分け持つことで、〈内/外〉の境目に共に立つことを意味するのである。

- (18) ルートヴィッヒ・クラークス、平澤伸一・吉増克實訳『リズムの本質について』（うぶすな書院、二〇一一年二月）また、『杳子』をクラークスのリズム論から読み解いたものに、松浦雄介「反復する身体―古井由吉における記憶と生」（『京都社会学年報』二〇〇四年二月）がある。
- (19) 大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店、二〇〇八年四月）以下からの大澤の論の引用はすべて本書に拠る。
- (20) 斎藤環「解離の時代にアイデンティティを擁護するために」（上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、二〇〇五年二月）
- (21) 大澤は『生権力の思想―事件から読み解く現代社会の転換』（筑摩書房、二〇一三年二月）で、こうした自己の断片化は、高度に情報化された社会の中で、人々がクレジット・カードやインターネット等に残された個人情報断片の束へと還元されていることが深く関係しているとも指摘している。

【付記】『杳子』の引用は『古井由吉自選作品』（河出書房新社、二〇一二年三月）に拠った。

Oscillating Body: A Study of Yoshikichi Furui's "Yōko"

KATANO, Tomoko

Yoshikichi Furui's "Yōko" (1970) was awarded the Akutagawa Award in 1971. This work, written in the third person, is about a young man referred to as 'him' and a young woman called Yōko who is mentally troubled, and starts from when they meet at the bottom of the valley in a mountain and follows their interaction for approximately one year.

In past studies, "Yōko" has been described as work that pioneered the post-modern situation of disassembling self-identity. However, the fact that Yōko's body changes moment by moment through her relationship with him has come to be overlooked. Therefore, in this paper, we focussed on the depiction of Yōko's body and analyzed how it changes. Also it reveals that her relationship with him also changes as Yōko's body changes.

Firstly, in the beginning of the first chapter, he suggests that Yōko's body is in the conflict of diffusion and contraction, and that him and Yōko resonate and alienate through the body. Moreover, the remaining chapters 2 to 8 are divided into 3 parts according to the change in Yōko's body. The first is the stage when Yōko's body repeatedly contracts and diffuses from the 2nd chapter to the 3rd chapter, and reverses swiftly. At this stage, he sees Yōko as sick and is trying to treat the disease. The second is the stage where Yōko's body changes to a weighty one with a sense of reality in the 4th and 5th chapters. At this stage, he abandons treating Yōko's disease and starts hoping to unite with Yōko. The third is the stage where Yōko's body oscillates like a thin membrane to realize life in chapters 6 to 8.

The oscillating body of Yōko has the possibility of self-producing a new body by oscillating the boundary between inside and out. For such Yōko, it is concluded that they are living together by just being in the vicinity and in contact. As mentioned

above, in this paper, I clarified that the possibility of a completely new life rooted in the body is drawn in “*Yōko*”.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程三年)

